

ニューオーリンズの風景

—コロニアルから現代へ—

野 間 晴 雄

I. はじめに

ニューオーリンズ¹⁾（英語：New Orleans, 仏語：La Nouvelle-Orléans）は、アメリカ合衆国のルイジアナ州（Louisiana：州記号 LA）南東部にある同州最大人口を有するミシシッピ川河口の港湾都市である。現在の市域は907 km²で、人口383,997人（2020年現在）、米国では中規模の都市である。ニューオーリンズ大都市圏人口（MSA）は1,271,845人、米国で第46位の規模の大都市圏である²⁾。

市域の70%以上がミシシッピデルタの海拔0メートル地帯で、湿地帯をポンプで排水し、人工の防潮堤（最大で約7m）によって市街地を辛うじてまもってきた。

ニューオーリンズは東部13州とは異なり、メキシコ湾を介してカリブ海や中南米につながる海港都市で、「最北のカリブ海の都市」ともいわれてきた。カリブ海域からの黒人や自由有色人に加えて、カナダのノヴァスコシア地方³⁾などからのフランス系カトリック、ドイツ人、イタリア人（とりわけシチリア）、ギリシャ人など南欧系の移民のほか、ユダヤ人、アイルランド人などが市内に混在している。さらに、中国人やベトナム人などアジア系の人びとも後に流入してきて、クレオール文化のるつぼといえる様相を呈している。民族特有の異色の建築様式が各所にみられ、クレオールのな独特の食べ物⁴⁾も都市の魅力である。マルディグラ（Mardi Gras）はニューオーリンズの世界的に著名なカトリックのカーニバル（謝肉祭）である。黒人によるジャズ発祥の地としての

歴史とも重なり、米国内ではたいへん人気のある観光地となっている⁵⁾。

ニューオーリンズでは現在も港湾での貿易・荷役・船舶にかかわる諸産業が栄えているが、時代を遡ると、これらの職種は労働集約的な性格をよりいっそう強くもっていた。さまざまな階層、出自の人びとが蝟集する混沌とした港湾都市としての性格を現在も色濃く残している。それらの人びとを対象とした消費やサービスに関わる業種も多い。退廃や治安の悪さが共存する大湿地のなかのフロンティアでもあった。フランスはここを拠点にカリブ海域への海上覇権を狙っていた。

私自身の私的なニューオーリンズに関する印象は2つある。そのひとつは、プロテストソングとしてのフォークソングの走りであるジョーン・バエズ Joan Baez (1941-) が朗々と歌うフレンチクォーターの売春宿をテーマにした「朝日のあたる家」House of the Rising Sun である。あとひとつは、テレビに毎日映し出された2005年8月のハリケーン・カトリーナで長期に水没したまちの光景である。この災害で一気に市の人口が減少し⁶⁾、車を所持できない黒人貧困層がとり残された。ますます黒人人口比率が高まってきている都市の現実である（後掲図10参照）。

この小論の目的はこのユニークな海港都市ニューオーリンズの形成から現在までを、その自然理学的立地と都市形成史を、景観変遷、風景の解釈という軸に沿って素描する歴史地誌である。すでに筆者は、同じような視点でアメリカ深南部のサウスカロライナ州チャールストンとその背域を考察した（野間晴雄 2021a）。今回はそれに続く第2報にあたる。両都市とも、ディーブサウス（深南部）を代表する歴史都市であることに加え、ジム・クロウ制度⁷⁾（Jim Crowism）= 黒人差別を保持してきた過去をもつ。ただ、今回は背域であるルイジアナ州やミシシッピ川流域の考察はほとんどしていない。別稿で米作の東部海岸平野からミシシッピ下流域やメキシコ湾岸への移動と絡めて改めて論じたい⁸⁾。

この小稿のもとになった探訪は、関西大学の学術研究員として2013年9月24

日から1年間、環大西洋世界を漫遊した在外研究である。この旅の最後に訪問したのはニューオーリンズで、その滞在は2014年8月26日～9月8日、9月14日～9月18日の計17日間である。ルイジアナ州の成立と産業の発展を踏まえながら、都市の立地するミシシッピ三角州の形成にも言及しながらの歴史地理的素描である。

図書館等での資料探索もさることながら、できるだけ州内を広く見て回ることに心がけた。レンタカーで、鳥趾状デルタの先端まで200 km あまりを走り、バトンルージュ、ラファイエット、海岸平野の岩塩産地や油田、天然ガス田、下流域の米プランテーション地域の残影なども見て回った。その時の観察メモや二次文献をもとに本稿をまとめた。最も多く参照したのは、現地で購入したR.カンパネラ『ニューオーリンズの地理』(*Geographies of New Orleans: Urban Fabrics Before the Storm*, 2006)の総頁433の大冊である。自然条件、都市の拡大、人口構成、エスニシティ、建築様式が、フィールドワークと伝統的な分布・記載と時系列センサス地区データをGISで分析した図表が秀逸で、カラー図版・写真が満載の労作である。

この小稿の構成は以下の通りである。まず、次章でルイジアナ州を中心としたミシシッピ川デルタの自然的基盤とニューオーリンズの自然立地の特色を析出する(Ⅱ章)。次に、フランス・スペインの植民地時代の都市の様相を略述する(Ⅲ章)。さらに、アメリカ合衆国に編入された時代のニューオーリンズの市街地の拡大過程やエスニシティの空間的分化過程を考察する(Ⅳ章)。最後に、現在のニューオーリンズを、2005年に発生したハリケーン・カトリーナによる未曾有の大水害と都市風景の変化を説明したい(Ⅴ章)。

Ⅱ. ミシシッピ川デルタとニューオーリンズの自然的基盤

1. ミシシッピ川デルタの形成とその変遷

日本ではマーク・トウェイン(Mark Twain)は、『トム・ソーヤーの冒険』(1876)や『ハックルベリー・フィンの冒険』(1885)の少年小説で知られてい

るが、アメリカの19世紀リアリズム文学を代表する作家である。22歳で少年時代からの夢であったミシシッピ川蒸気船の水先案内人となって、蒸気船内の人物観察から人間を見る眼を養っていった。筆名のトウエインは、蒸気船が座礁せず安全に通航できる限界の浅さ水深「二尋」（約3m）に由来する。

その彼のエッセー『ミシシッピ川の生活』（*Life on the Mississippi*, 1874）は、「ミシシッピ川流域は国の身体（body）である」で始まる。ミシシッピ川は北アメリカ最長の大川で、本流の長さは3,779 km、「アメリカのナイル」に喩えられる。流長は世界で第4位、ナイル川（6,650 km）や長江（6,380 km）には遠く及ばないが、流域面積は322万 km²で、長江の196万 km²の1.6倍と広大である。流域が31州にまたがるアメリカ合衆国中央部の大動脈である。ただ、右岸上流域に乾燥地帯を含む。支流のミズーリ川はロッキー山脈の乾燥地帯が源流である。一方、オハイオ川はアパラチア山脈に発する。ミズーリ州セントルイス付近で本流とこの2大支流が合流し、ここから大きな川幅をとって中央平原をメキシコ湾へ南流する。

このミシシッピ川に最初の蒸気船「ニューオーリンズ」号が就航したのは1811年である。アメリカの実用蒸気船を開発したフルトン（Robert Fulton: 1765-1815）は、外交官・弁護士のリヴィングストン（Robert R. Livingston）と組んで、ペンシルベニア州ピッツバーグからニューオーリンズまで蒸気船で下る試みをした。ピッツバーグは、アパラチア山脈の西麓にあるオハイオ川上流の鉄鋼業の工業都市であるが、河港として西部開拓の物資供給地でもあった。ここからセントルイスでミシシッピ川に合流し、ルイジアナ州の河港ナチェス（Natchez）を経由して1812年1月12日にニューオーリンズ港に着岸した。市内では大変賑わいであったと新聞は伝える（Samuel 1955: 24-31）。以後、ナチェス・ニューオーリンズの蒸気船の航路は物資輸送のドル箱となる。

ここでの含意は、ニューオーリンズは、当初は海港としてではなく、経済的には内陸水運が中心の河港であったことである。アメリカ合衆国として、フラン領であったルイジアナが、アパラチア山脈越えて、西部開拓の名のもと、北

部の経済力の影響下に包摂されていく過程の南部の中心都市とも解釈できる。

ミシシッピ川は、下流のアーカンソー州、ミシシッピ州、ルイジアナ州では普段は川幅1.6 km の場所が雨の多い時期には80 km まで拡大する (ラッシュェ 2021 : 40)。ここにレス起源の肥沃な風成土が運ばれる。このミシシッピ川本流の氾濫原が、南北戦争 (1861-65) 以後、大型農業機械を用いた労働節約的大規模稲作適地となっていた⁹⁾。

図1は Bernard and Leblanc の地形分類図を貝塚爽平が簡略化したものに (貝塚爽平編 1985 : 56-57), Russel/Fisk and Kolb/Van Lopiok らの炭素同位体による年代の成果をもとに、私がラッセルらが編集した図から、直近に形成された2つの古デルタのおよその範囲を描き、さらに主要地名を加筆した。現在のミシシッピ三角州の本流流路 (伸長川) の先端は、流量、流送土砂が多く、

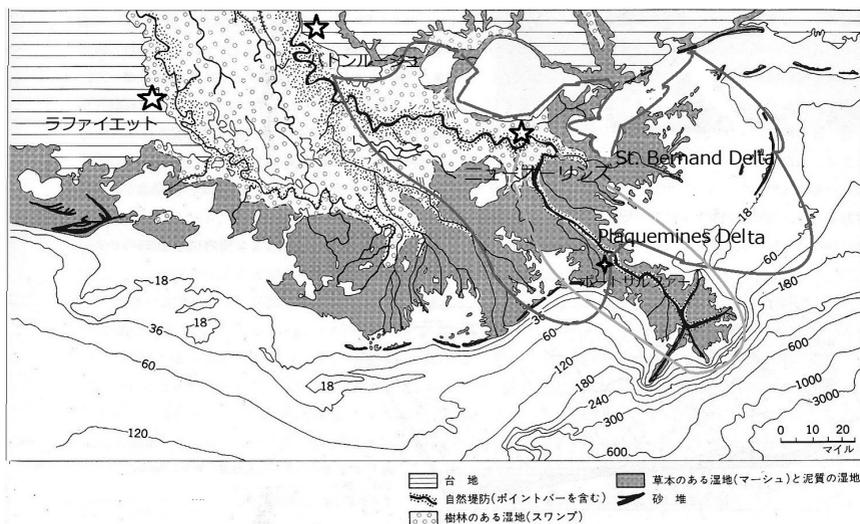


図1 ミシシッピデルタの地形分類と4300年前以後の変遷

(貝塚ほか 1985 原図は Bernard and Leblanc, 1965。単位はマイル。
Russel/Fisk and Kolb/Van Lopiok の成果を筆者簡略化して追記。
古デルタの年代は Fraizer, 1967による。)

海面勾配がきわめて緩やかで、沿岸流も弱いために、鳥趾状三角州を形成する（鈴木隆介 1998：340-341）¹⁰⁾。

ニューオーリンズよりさらに下流では、本流が3本に分かれる。そのうちの南の水路が外洋船の航路となっているが、土砂の堆積で常に浚渫を必要とし、座礁も多かった。その意味では、できるだけショートカットしてメキシコ湾に出ることがニューオーリンズに課せられた課題であった。

ニューオーリンズから約200 km 南下した地点に河口がある。ポートサルファー（Port Sulphur）付近が1,100年前から現在までのプラケミ三角州（Plaquemines Delta）である。顕著な鳥趾状デルタを流末に形成する。自然堤防上に道路が走り、途中にはポートサルファーのような海底の硫黄採掘で栄えた町¹¹⁾、ヴェニス（Venice）のような天然ガスや石油採掘・精製に特化した小さな町もある（図2）。しかし周辺の風景は、草地、湿地（図3）に、キャンピングカーなどを駐車させた別荘が点在する荒涼としたものである。

また、図1のセント・ベルナードデルタ（St. Bernard Delta）は、4,300～



図2 ヴェニスの精油プラント
(2014年9月筆者撮影)

ニューオーリンズの風景
—コロニアルから現代へ—（野間）

1,000年前までの古デルタで、ニューオーリンズの地形の原型はこの時期に作られた。さらに本流の西にはラフォルシェ川（Bayou Lafourche）の緩慢な流路がメキシコ湾に南下する。この地域は3500年～100年前に形成されたデルタで、1904年にこの川が封鎖されて、川上からの土砂が堆積しなくなって不活発（死滅）デルタになったが、もともとはミシシッピ川の本流と推定されており、「ラフォルシェ三角州」を形成していた。

バイユー（bayou）はミシシッピ川下流の緩流、沼地、沼沢地を意味する。アメリカインディアンのチョクトー族の「ゆっくり流れる小さな川」という *bayuk* に由来し、流れのほとんどないマングローブ地帯となっている。本流の現河道への移動とともに、小さな川になったものが多いが、無数の編み目のような水路網を形成する。図1では、草本のある湿地（marsh）と、樹木のある湿地（swamp）を明瞭に区別する。汽水性のマーシュには、自然堤防やポイントバーが本流を除いてほとんどみられないが、スワンプには、ラフォルシェ川を含めて顕著な分布を示す。ここは海水が遡上しない淡水性の湿地や氾濫原



図3 ミシシッピ川鳥趾状デルタの塩性湿地の植生
(2014年9月筆者撮影)

(floodplain) 域となっている。

一方、ラファイエットが立地する西部は台地地域となっている。これらは以下の3つの地形区に分かれる (Campbell 2008: 52-53)。1) 切り立った台地 (Blufflands), 2) プレーリー (Prairies), 3) 低地森林地帯 (Flatwoods)。

これらは、氷河期時代の旧ミシシッピ川の旧氾濫原で、自然堤防や旧河道がみられる。同じ起源のものが、本流の右岸、州都バトンルーージュ (Baton Rouge) の立地する台地にも広がる。そのうちでも、1) はこれらが最も顕著で、氷河起源の風積土であるレス (loess) がその上を厚く覆っており、肥沃である。ただ、細かいシルト質土壌は侵食にもろく、台地端は軟弱な崖となっている。州の花であるモクレン (magnolia) やハナミズキ (dogwood), トネリコ (ash), オーク (oak) が生育する。2) は1) のブラッフランズよりも平坦で、乾草用のウシクサ (bluestem grass), スゲ類 (sedge), スイッチグラス (switch grass) などの草本類が卓越するが、木本は少ない。開拓集落の多くがここに立地する。3) は2) よりも排水がよく、松林やカシ, トネリコなどの硬木と、コイチゴツナギ (wiregrass) などの牧草やシュロ (palmetto) が混在する。

鳥趾状のミシシッピ川本流に沿って建設されたジャクソン砦 (図4) は、ミシシッピ川の西岸にニューオーリンズの南約110 kmにある。1822年から1832年の間に建設された。1862年4月、南北戦争では勝利した北軍の捕虜の刑務所として利用された。現在は国営の公園となっているが、ハリケーン・カトリーナやリタでは数週間浸水した。五稜の石積要塞である。

2. 湿地との共生—ケイジャン文化

ルイジアナ州南部に移住したカナダ系フランス人 (アカディア人) の居住地は、バイユー・ラフォーシェとバイユー・デ・スコールの近くにある。彼らは河川沿いの自然堤防の高みに居住した。バイユーはケイジャン文化と密接な関係をもつ。ここは東遷していくミシシッピ川のかつての本流が形成した古デル

ニューオーリンズの風景
—コロニアルから現代へ— (野間)



図4 ジャクソン要塞
(2014年8月筆者撮影)

タであるが、現在は川上からの水量の供給もほとんどなく、死滅した海成デルタの上部となっている。形成のプロセスは、ベンガル低地（野間晴雄 1990；1994）におけるモリバンドデルタ（moribund delta）の先にあるシュンダルバン（Sundarbans）マングローブ地帯に近いが、川幅も短く、水量も少ない。インドとバングラデシュ両国またがるシュンダルバンがいまなお世界最大のヒルギ科を中心としたマングローブが保護されているのに対して、メキシコ湾岸のバイユー地域は、内陸大水路/沿岸内水路（Intracoastal Waterway, ICW）¹²⁾が貫いている。ルイジアナ州域ではバイユー・ラフォルシェ Bayou Lafourche, 「バイユー・カントリー」と呼ばれ、アカディア人の最初の入植地となった。以前はミシシッピ川の支流であったが、1905年に堰き止められ、新鮮な水が供給されなくなった。その後、湿地の水産資源は減少し、塩水湿地化が急激に進行している。この阻止のため、堰の廃止、浚渫、塩水防止樋門の設置、ポンプでの淡水導入が近年始まり、バイユーの復活を目指している。

ニューオーリンズを中心に、テキサス州ヒューストンからアラバマ州モービ

ルまでのメキシコ湾に接する地域一帯は、ケイジャン（フランス語を話すアカディア人）とクレオール（フランス人とアフリカ人、インディアン¹³の混血）の文化に最も密接に関連している。

彼らのルーツはカナダの沿海州、特にノヴァスコシア州からのアカディア人の亡命者の末裔で、旧地ではカトリックを信奉する民族島を形成していた。1755年、英仏戦争フレンチ・イギリスの間の戦争により逃亡した農民や漁民である。プロテスタントの福音派が多い南部では、例外的に独自の生活スタイルを保持している。

ニューオーリンズから南へ100 km いったテレンボーン教区（Terrebonne Parish）のジャン・チャールズ島（Ile de Jean Charles）は島自体が消滅の危機にあり、「環境難民」として全島民移住が考えられている。ここは、南東部に住むピロキシー族、チョクトー族などの先住民インディアンが、白人の目に見えぬ圧力やセミノール戦争などによって、元来の居住地を追われて南下して最終的にたどり着いた地であった¹³。ここでエビ、カキ（牡蠣）、魚や農業で自給的な生活を送っていた。アカディア人と先住民はこの地で生き延びるすべを共有し、両者は混血、ハイブリッド化していった。ここに20世紀初頭に始まったテキサスの石油発掘ブームがルイジアナ州にも波及すると、沿岸湿地には多くの掘削油井が林立するようになった。

長靴の形をしたルイジアナ州はもはや今はない。「かつて長靴の底となっていた湿地帯は、今はぼろぼろに破れ、擦り切れている。ゴム底というよりもメッシュのようだ。そして50年後にはすっかりなくなっている可能性が高い。米国地質調査所によると、ルイジアナは1932年から2000年の間に4,920平方キロメートル近くを失ったそうだ。それはデラウェア州の面積とほぼ同じくらいである。」（ラッシュ 2021：19）。いかに地球温暖化による海面上昇、油田掘削、地盤沈下によって海岸侵食がはげしかったかをラッシュは告発している。

Ⅲ. フランス・スペイン領時代のニューオーリンズ

1. フランス領・スペイン領ルイジアナとニューオーリンズ

1679～1682年、フランス人の探検家で毛皮商人のラ＝サール (Sieur de La Salle: 1643-1687) は、セントローレンス川を遡上、モントリオールから五大湖を経由して、ミシシッピ川流域をカヌーで探検した。1682年2月にはメンフィス (テネシー州) に小さな砦を作り、さらに下って4月9日にミシシッピ川河口に到着した。彼はこの地をラ・ルイジアナ (La Louisiana) と名付け、時のルイ14世に献上した。したがって、この時期のルイジアナは、現在のアメリカ合衆国のルイジアナ州の範囲よりもずっと広い、ミシシッピ流域全体をさす地名である。

ニューオーリンズ (La Nouvelle-Orléans) は、1718年、モントリオール生まれのフランス系カナダ人であるビーンビル (Jean Baptiste Le Moyne Sieur de Bienville: 1687-1767) によって設立された。植民官ジャン＝バティスト・ル・モワン・ド・ビアンヴィル (Jean-Baptiste Le Moyne de Bienville) の指導の下での開発であった。当時フランス王国の摂政であったオルレアン公フィリップ2世 (Philippe II, Duke of Orléans) にちなんで名付けられた。

害虫に強い建築材としてのイトスギ (Cypress) が初期の輸出品であった。それがフランス・スペイン時代 (1699-1803) になると、米と砂糖が河川沿いのプランテーションで生産され、主要産物となった。

しかし、フランスはこの植民地の経営を、財政難から維持することができなかった。1763年のヨーロッパでの七年戦争と連動して起こったイギリスとフランスの戦争 (フレンチ＝インディアン戦争, 1755～63年) の結果、フランスは敗北する。1763年のパリ条約によって、ミシシッピ川以西をスペインに、以東をイギリスに譲渡した。ただし、メキシコ湾岸部やミシシッピ川河口の海岸部はスペイン領となった。そのため、フランスの支配が長かったニューオーリンズもスペイン領に編入された。

その後、ミシシッピ以東のイギリス領東ルイジアナは、1783年のパリ条約でアメリカ合衆国領となる。一方、ミシシッピ以西スペイン領となった西ルイジアナは、1800年にスペインとフランスの密約で、ナポレオンが統治するフランスに委譲された。それを知ったジェファソン大統領は、ミシシッピ川やその河口のニューオーリンズ港は西部や南部の物資輸送に不可欠であり、従来、スペインはその航行権や港の使用をアメリカに認めていたが、フランスも同様に認めるかどうかを疑問視していた。そこでフランスからニューオーリンズだけを購入しようと画策したが、事態は思わぬ方向に転回する（久田由佳子 2014: 78-79）。1803年、アメリカがこのルイジアナの地全体（東・西ルイジアナ）を購入することになったのである。その売却価格は1500万ドルで、1 km²あたりわずか約14セントという破格の安値であった。この結果、アメリカの領土はミシシッピ川右岸の支流であるミズーリ川、アーカンザス川、レッド川流域を含めて、従来の約2倍の面積を有することになった。

この混乱の時期、カリブ海のフランス領サン・ドマング¹⁴⁾（現・ハイチ）では黒人奴隷による革命が起り、多くのフランス人やクレオール（フランス人と黒人奴隷の混血）がニューオーリンズに流入した。当時の町の人口は約1万人であった。ナポレオンがルイジアナを手放したのは、フランス領サン・ドマングで独立運動が起きて、カリブ海とニューオーリンズを結ぶ覇権構想が潰えたためといわれる。一方、アメリカ合衆国にとっては、この買収によって、反連邦派のジェファソンが「自由のための帝国」建設の夢を膨らませたのである。

2. 歴史的核フレンチクォーターの建設

ニューオーリンズはほとんど人の手が入らない未開の大湿地をなすミシシッピ川デルタ本流の蛇行部分、左岸の自然堤防上に建設された。ニューオーリンズは立地からは河港ではあるが、港湾区分では海港（seaport）に分類される。海港とは、大型船の就航を前提とした海洋と直接結ばれた港で、海岸にあるか

ニューオーリンズの風景
—コロニアルから現代へ— (野間)

内陸にあるかは問わない概念である (山口平四郎 1980 : 3)¹⁵⁾。

位置は北緯30度, 西経90度である。日本の緯度では吐噶喇列島 (鹿児島県十島村), 中国では寧波, エジプトのカイロと同緯度である。ケッペンの気候区では湿潤温暖気候 (Cfa) に分類されるが, 熱帯との移行帯にあたり, 冬は温暖, 夏は高温で湿気が高い¹⁶⁾。標高はデルタ河口のため自然堤防部を除いて微高地はなく, 海拔が0 m 以下の後背湿地もひろく広がる。

図5は地盤高をフィート (1 foot=0.3 m) で示したものである。最初のまちづくりが行なわれた蛇行の攻撃斜面 (攻撃部) に位置するフレンチクォーター (French Quarter) で9フィート (約3 m) あり, 河床とのあいだは蛇行崖 (meander scarp) となっている。高層建築やオフィスビルが建つCBDやGarden Districtは3~6フィートで (1~2 m) に過ぎない。これらがダウン

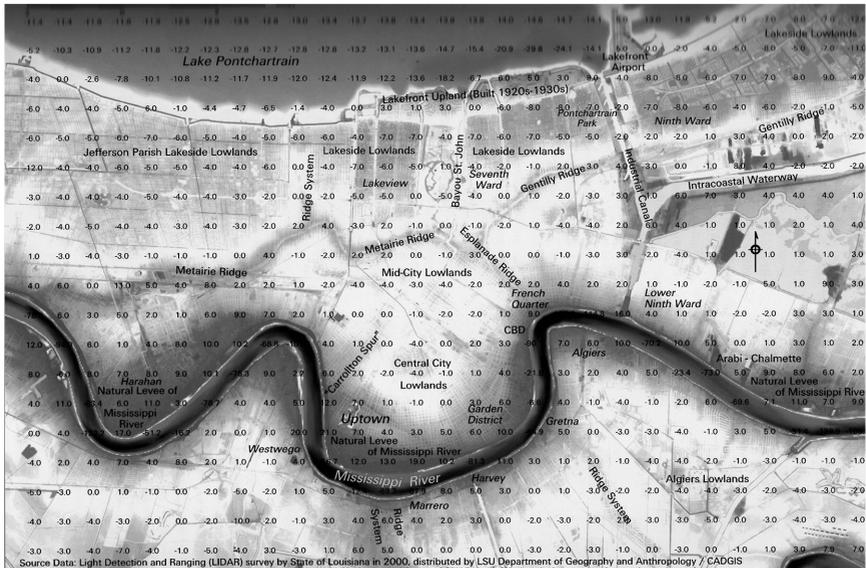


図5 ニューオーリンズ主要部の地盤高分布
(Campanella 2006, 地図上の標高の単位はフィート。)

タウン (Downtown) と呼ばれている。

一方、アップタウン (Uptown) はポイントバー (蛇行州) の部分にあたり、フレンチクォーターよりも地盤高はやや高い。その背後は後背湿地 (back swamp) となっていて、海拔は 0 m 以下である。ここに Central City, Mid-City 地区などが20世紀に発達した。ここが中・下層の住宅地となっていて、マイナス 2 ~ 6 m と低平かつ低湿である。

図 5 の中央に東西に延びる線条微高地である Metairie Ridge と Gentilly Ridge は、旧ミシシッピ川 (セントベルナードデルタ) の自然堤防と推定される。その北のポンチャートレイン湖畔 (Lake Pontchartrain) の低い砂州のあいの凹状低地 (Lakeside 地区) は、いずれも海面下 5 ~ 7 フィート (マイナス 3 m 前後) である。整然とした方格の宅地分譲地で、もっぱら白人中間層の居住地となっている。もっとも低平なのが、東ニューオーリンズといわれる工業運河 (Industrial Canal) 以東の地である。もっぱら黒人やベトナム人地区の戸建て居住区となっている。

以上の記述からわかるように、狭い自然堤防が唯一の高みであるため、人口増加による市街地拡大は必然的に、北方向の湖畔にむかっていった。この下流域での米やサトウキビプランテーションの多くは、蛇行河川にほぼ直角に後背湿地に向かうように短冊状に区割されるが、この分割原理は町の行政区 (ward に相当) の形態や境界にも応用されている。

高潮やハリケーンから比較的安全と考えられたミシシッピ川左岸の自然堤防上、河川が三日月形に湾曲する自然堤防の微高地上に最初の市街地は建設された。1722年には仏領ルイジアナの首都となるが、当時の人口はわずか500人で、住民は樹枝や葦などを用いた粗末な家に住んでいた (藤岡ひろ子 1987 : 30)。ポンチャートレイン湖との間には、セントジョーンズ川をインディアンがすでに交易路として利用してきたことも選定の大きな要因であった (中川正 2018 : 1028)。この交易によって当時は経済が維持されていた。

1762年にスペイン帝国に割譲されたが、1780年にナポレオン皇帝がルイジア

ニューオーリンズの風景
—コロニアルから現代へ— (野間)

ナをフランスに返還させた。1800年に、アメリカ合衆国による「ルイジアナ購入」の直前に再びフランスに譲渡される。そして1803年には財政上の必要からアメリカ合衆国に売却された。

図6は1765年のニューオーリンズの歴史的核（歴史的核心地）¹⁷⁾であるフレンチクォーターの都市プラン図である。ヴォーバン式城塞で二重の稜堡で防御された長方形の囲郭都市となっている。11ブロック（当初は9ブロック）、川側の中央の広場（Palace des Armes）に教会が建設されて、行政府や牢屋などが設けられた。ここが文字通り、軍のパレードの場所であり、それがのちに公共の広場となっていった。現在、観光客が最初に訪れるのがこの広場である。歴史的建造物がリノベーションされ、賑やかなショッピングアーケードが続き、ジャズのストリートミュージシャンや路上芸人が集う場所となっている（図7）。中央の区画だけは中間にもう1本道路が設けられている。地図でみる

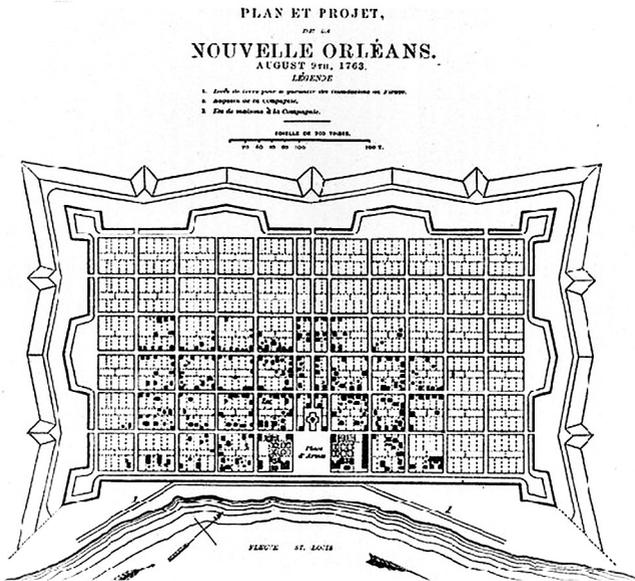


図6 フレンチクォーターの都市計画図（1763年）



図7 フレンチクォーター広場 (Plaza des Arms)

(2014年9月筆者撮影)

限り、周辺には空地が目立ち、なお未完成的な形態となっている。宅地ブロックは中間の5条の道路に沿って縦長の規則的な区画になっているが、側面にも家屋がみられる。横方向重視の街路プランではあるが、実際は柔軟に運用されたと思われる。

この囲郭都市の防御の対象としたのは、先住民であるインディアンの襲撃のほか、イギリス、スペインなどの海上からの攻撃である。また、この都市の経営が、フランス王室から委託された開発企業によって行なわれたことは重要である。その主役がジョン・ロー (John Law)¹⁸⁾ である。しかし投機目的でこの計画に参画した人々は、政府に償還義務のある国債を、償還義務の無い株式に交換して大量の紙幣を印刷して株式配当の支払いに充て、混乱を招いた。

ただし、1788年と1794年の大火によって建物の8割が灰燼に帰したので、現在、残存する建築はほぼすべてが1790年代後半以降、スペイン様式による耐火性を重視したタイルの平屋根の建造物が中心となっている。フランス様式の尖った屋根はタイルの平らな屋根になり、耐火性のために木造の壁は禁止さ

れ、色とりどりに塗られた漆喰になった。後に精巧な鉄細工のバルコニー（屋根なし）やベランダ（屋根がある）で飾られた。図7の写真では精緻な意匠を施したバルコニーがみられる。

Ⅳ. アメリカ合衆国時代のニューオーリンズ

1. カリブ海・中南米へのゲートウェー

19世紀前半のニューオーリンズ港は、ルイジアナ植民地の輸出品の貯蔵庫（depot）から、アメリカ合衆国の有力な貿易港として大きく成長した。1800年には人口8,000人 1,000世帯であったが、1810年には人口17,244人（白人6,316人、黒人5,691人、自由有色人4,950人）、1840年には、102,193人（白人53,519人、黒人奴隷23,448人、自由有色人19,226人）、1850年には119,460人（白人91,431人、黒人奴隷18,068人、自由有色人9,961人）と10倍以上に増大した（Campanella 2006: 5-29）。

1840年代には国内第2位（第1位はニューヨーク）、世界第4位の大貿易港に成長する。1812年にミシシッピ川に蒸気船が導入されるまでにも、平底船（flatboat）によって、流域全域から農産物を東海岸の諸州や、ヨーロッパ、ラテンアメリカの諸港に出荷されていた。そのおもな輸入品は、バナナなどの熱帯産のフルーツとコーヒーである。キューバ、ジャマイカや中米からが主で、アメリカ南部・東部のコーヒー飲用文化の窓口がニューオーリンズであった。1840年代までに、港はニューヨークに次いで米国で2番目に大きなコーヒーの輸入港となった。1802年には1,438袋のコーヒーが到着したにすぎなかったが、1857年には530,000袋以上のコーヒーがニューオーリンズに到着した。19世紀末から1970年頃まで、数十のコーヒー輸入業者がニューオーリンズ地域で操業し、全国のコーヒー焙煎業者にサービスを提供していた（ルイジアナ州立博物館ウェブサイトを参照）。その多くがフレンチクォーターの西に隣接したマガジン・ストリート（倉庫通り）に立地していた。図8の鉄道駅の終点から西にのびる湾曲部が、この時代の港湾機能の中核部である。現在では住宅と商業用の

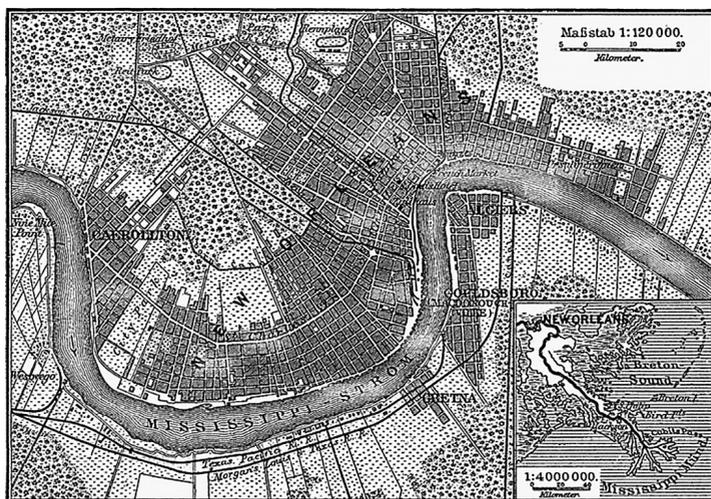


図8 1888年のニューオーリンズ市街地地図
(東の屈曲部北岸がフレンチクォーターである。)

建物が混在しており、19世紀後半の古い家屋と、アンティークショップ、衣料品店、レストラン、バーなどからなる古い商業地区を形成している。

一方、主要輸出品は、南部の比較的乾燥した台地で栽培される綿花である。これらはミシシッピ川の支流も含めた広大な内陸水運ネットワークによって、ニューオーリンズへの集中が実現したものである。

しかし1870年代になると、後背地であるミシシッピ川左岸、オハイオ川流域とアメリカ東部がアパラチア山脈越の鉄道網の開通によって結ばれると、ニューオーリンズの相対的な地位はしだいに低下していく。

南北戦争と「再建の時代」(1865-1877)は、ニューオーリンズにとっては受難の時代であった。膨大な戦費を使ったため、ドックの修理や倉庫、埠頭の建設に支障をきたすようになった。そのため、市はリバーフロントの一部を私有企業に貸し出した。しかし短期利益を重視する私有企業の施設は、高額の入港料とあいまって、貿易は相対的に衰退していった。19世紀を通じて膨大な数の

ニューオーリンズの風景
—コロニアルから現代へ— (野間)

荷役労働者がウォーターフロントで働いていたが、20世紀初頭には機械式コンベアとトラックが普及することで、ドックで働く労働者数が大幅に削減されたことも停滞を招いた要因である。

もうひとつ、この湿地の港湾都市は20世紀になっても黄熱病の脅威に直面していた。いったんこの病気が蔓延すると、何ヶ月も港が閉鎖されたため、輸業者は貨物を別の港へ運ばなければならなかった。

1900年のニューオーリンズの人口は287,104人（うち黒人77,741人、27%）で、シカゴなど中西部の工業都市の発達もあって、全米で15位まで順位を下げた。1910年には339,075人（うち黒人89,262人、26%）とその伸びは緩やかになった。その都市の拡大は、自然堤防を越えて北方背後の後背湿地への方向であった。

20世紀のニューオーリンズの都市拡大は湿地の開発による。排水機によって過剰な水をくみ出して宅地としていった。また、道路や橋の建設も郊外への拡張を容易にした一因である。ここにミドルクラスの住宅地が建設された。そして、60~70年代には、ポンチャートレイン湖へつながる工業運河より東の地域が黒人、アジア系の人びとの住宅地として拡大していった。

2. フレンチクォーターの建築と市街地の風景

フレンチクォーター地区を中心に、1960年代にルイジアナ歴史建造物協会 (Louisiana Landmarks Society) が、Vieux Carré Survey¹⁹⁾として、一軒一軒の建物の台帳を作成した。関連文書や地図類（火災保険地図も含む）や建物様式や構造、建築年代、保存の重要性などが記載されたサマリーもある膨大な資料である。カンパネーラはこのデータを、GISを用いて「建築地理学」と命名して分析しており、本書の圧巻である (Campanella 2006: 99-167)。

図9はそこから引用した地区内に現存する1750~2000年の250年間にわたる(60年代以降の補充調査も含む)建造物の建築年代別出現頻度である。この図から読み取れることは、1830年代をピークに、クレオールスタイルが都市建設

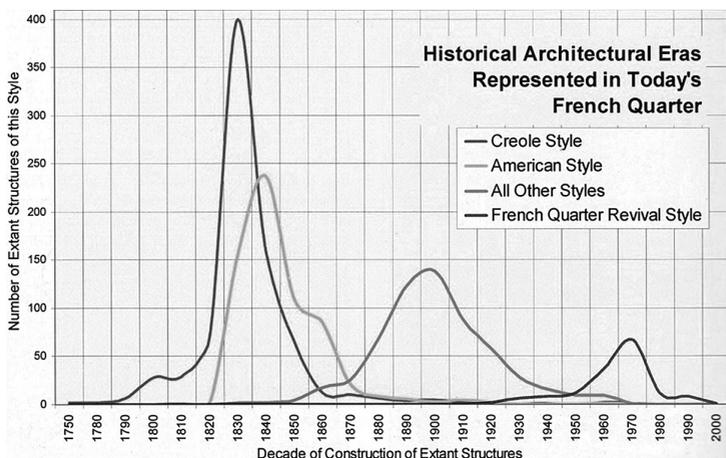


図9 フレンチクォーターの様式別建築年代
(Campanella 2006: 122, 原図の横縮小比率を変えてある)

初期から優勢であったのが、40年代にはアメリカンスタイルに置き換わっている点である。このアメリカンスタイルは、実質的には19世紀前半に欧米、とりわけ米国で優勢になった建築運動である。大理石を用いた重厚なギリシャ神殿のスタイルを追求したものである。そのミニチュア版の普及が、ニューオーリンズでも1840年代半ばにピークを迎える。クレオールスタイルとは当時のコロニアルスタイルであり、それがアメリカ編入によって建築景観でも激変した。その凝縮過程をこの図は物語っている。

1840年のニューオーリンズの人口は102,193人でうち白人53,519人、黒人奴隷23,448人、自由有色人19,226人で (Campanella 2006: 12), ニューヨーク、ボルチモア (メリーランド州) に次ぐ国内第3位の人口数を誇り、フィラデルフィアやボストンよりも多かった (図10)。

南北戦争後、20世紀の転換点には「他のスタイル」が優勢になる。具体的にはイタリア様式とヴィクトリア様式が中心であった。

またニューオーリンズが起源で、庶民の建築様式としてとされるのがショッ

ニューオーリンズの風景
—コロニアルから現代へ— (野間)

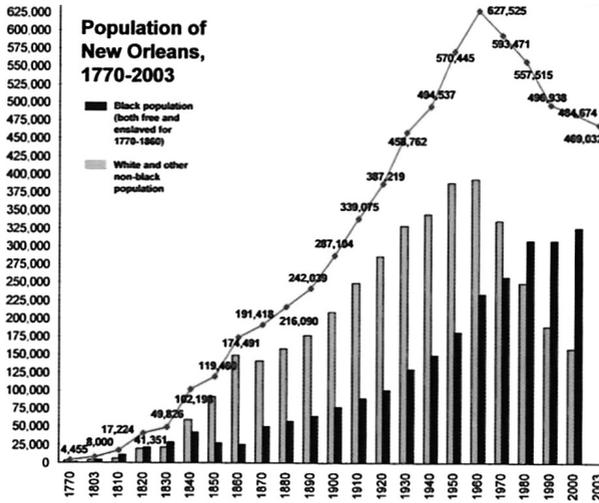


図10 ニューオーリンズの白人・黒人別人口推移
(Campanella 2016)

トガンハウス (shotgun house) である。ドアを開けて玄関を入ると、すぐに3～5室が一行に配される平面構成で、廊下やホールを有しない。通気性を重視し、湿度が高く浸水の恐れの高いニューオーリンズでは基壇を設けて階段で出入りする形式が多い。フレンチクォーターでは1870年代から始まり、ピークが90年代で、1910年代の建築も多い。本来は中間層の建築様式であったが、しだいに貧困層のものと考えられるようになっていった。ニューオーリンズでは、東部のほぼ黒人のみが居住する地区に現在もこの様式が卓越する (図11)。この写真では、入口が2つあるために、1棟2戸の形式となっている。湿気や浸水を防ぐため1m程度の土盛りがしてあり、階段ではいることになる。フレンチクォーターの東端には市場が設けられた (図12)。現在はみやげ物などを扱う観光スポットとなっている。

市内には現在でも路面電車 (street car) が5路線ある。このうち、郊外住宅地を結ぶセントチャールズ線は、馬車・蒸気軌道として1831年に開通した世



図11 Gentilly 地区のショットガンハウス
(2014年9月筆者撮影)



図12 フレンチ市場 (フレンチクォーター)
(2014年9月筆者撮影)

ニューオーリンズの風景
—コロニアルから現代へ—（野間）



図13 1988年に開通した路面電車のリバーフロント線
(2014年9月筆者撮影)

界でも最古の路面軌道である。現在も市内観光や市民の利用が多く、新規開通路線もある（図13）。

V. ハリケーン・カトリーナ以後

1. 浸水の範囲と人災としての側面

ルイジアナ州は熱帯低気圧に影響されることが多く、特にニューオーリンズ周辺の低地は大型ハリケーンに襲われやすい。多くのバイユー、湿地、入り江がある独特の地形のために、ハリケーンによる浸水被害が大きくなる。また特に夏には雷雨が発生しやすい。年間平均60日以上雷雨が発生しており、これはフロリダ州に続いて高い数字である。

2005年8月29日に、フロリダ半島からメキシコ湾を西に進んだのちニューオーリンズ市を直撃したハリケーン・カトリーナは、最大風速が毎秒70m超である「カテゴリー5」の過去最大級勢力であった。市域の70%が海面下という土地条件下での高潮被害（6～9m）で、米国災害史上、最大のものであっ

た（大楽ほか 2006：23-24）。95%の市民が避難し、市長はスーパードームを移動困難な2.6万人のために避難場所に指定して、食料・水を供給した。このハリケーンで地域の8割が水没、メキシコ湾沿岸に集中する石油関連施設やパイプラインなども大きな被害を受けた。死者1,836人（うちニューオーリンズが1,577人）、被害額は1250億ドル（約14兆7000億円）に達した（国連国際防災戦略 ISDR が2006年1月30日に発表）。

このような大きな被害を出した要因として、調査委員会は数十年前に米陸軍工兵隊（USACE）が建設した洪水調節システムの故障が原因であると結論づけ、人災の要素がきわめて強いとした。ただし、連邦裁判所は、1928年の洪水調節法で主権免除のため、政府にその責任を問うことは出来ないとした。このような沿岸低地での堤防工事の遅れに加えて、連邦政府や州政府、ニューオーリンズ市当局間の連携のまずさ、高齢者や市人口の多数を占める黒人低所得者層の避難体制の不十分さ（自家用車の非所有、連絡道路の閉鎖）などによって、被害がいっそう拡大した。貧困、エスニシティ、ガバナンスが複雑に絡んだ人災という側面をこの災害は多分にもっており、世界中から注目された。

ミシシッピ川・メキシコ湾連絡運河（Mississippi River-Gulf Outlet Canal：MRGO）²⁰ は、大西洋とメキシコ湾の沿岸地域をつなぐ沿岸水路 ICW（Intercoastal Waterway）につながる運河として、1965年に米国陸軍工兵隊が連邦の決定で建設された122 km の内陸水路である。ニューオーリンズが、ヒューストン（テキサス州）に比べて、メキシコ湾岸で港湾立地上の不利から発展の遅れが目立ってきたのを奪回する目的もあった。この水路の完成で約64 km の流路短縮が可能となった。ニューオーリンズ港はミシシッピ川沿いの埠頭の多くを放棄し、その活動を工業用運河、沿岸内水路、MRGO が結合したインナーハーバーに移転する計画であった。今回、破堤した水路の多くは、この工業運河沿い集中した。80年代後半に資金不足からこのニューオーリンズの新港湾計画（Centroport USA）を断念していた。その放棄地がハリケーン・カトリーナの襲来によるニューオーリンズ市内の被害を、塩水遡上、高潮の増

幅などによって助長させた面も指摘されている。そのため現在ではゲートは閉鎖され、ハーバーとしての役割を果たしていない。

歴史家モリスは、環境史の立場から、自著の *The Big Muddy* (2012) で、ミシシッピ川下流域がいかに巨大で大量の土砂で満ち満ちていたかを過去500年間の環境史で詳述し、以下のような2つの流域 (valley) を峻別した (Morris 2012: 1)。

ミシシッピ川には「湿った流域」と「乾いた流域」の2つがある。河川氾濫と泥の堆積で「湿った流域」が生まれ、人間が排水して硬化した土塊^{つちくれ}を泥状態にすることで、「乾いた流域」を作り上げてきた。

「乾いた流域」では綿花やサトウキビ栽培が行なわれ、湿地が豊かな畑作農業地域となった。また、ニューオーリンズのまちは人工の防潮堤やポンプ排水のような工学的対応を、「湿った流域」で局地的かつ集中的に実施することで、海面下の窪地にも人間が居住する都市環境を人工的に創出してきた。しかしそれらの一連の行為が、「病的な景観 (pathological landscape)」を生み出してきたとモリスは訴える。農地開発、都市拡大、人工的な滞留する水域が生まれることで、マラリアの蔓延を助長した。アメリカ時代には、貿易港としてニューオーリンズが発展するが、熱帯的気候のハバナ (キューバ)、ベラクルス (メキシコ)、キングストン (ジャマイカ) などからの物資や人の流れが加速されることで、黄熱病が毎年のように市内で流行するようになった。

1944年の氾濫制御法は、河川土木工学者に湿地開発の機械力使用を促進させた。機械力使用による農業の大規模化は乾いた土地の価値を高めたが、綿やサトウキビの販売価格の低下は、再び乾いた土地を湿った土地 (水田化) にして、米の大規模栽培に向かわしめた。多くの黒人労働力が北部五大湖沿岸の工業地帯に移動していき、労賃が上昇したことで、ルイジアナでは肥料や農薬の多投による単位面積当たりの収量増加へ舵をきった。

現在、「湿った流域」では農業に代わって、このような人工的な土地改変を自然状態に戻そうという動きがみられる。ナマズやザリガニの養殖による農業から養殖への転換である。ここにも大きな問題がある。養殖池への穀物飼料の多投や除草剤や殺虫剤の使用、トラクターによる漁獲など、「乾いた流域」で行なわれきた所作が、再び「湿った流域」で再現されている。企業的な養殖を目指しての魚種のモノカルチャー化もここでは環境保全の観点からは大きな問題である。

そこに決定的な打撃を加えたのがハリケーン・カトリーナであった。モリスは著書の第11章「自然の再来：ハリケーン・カトリーナとビッグ・マッディの将来」で、これまでの「水を征服する」という考えは改めて、ニューオーリンズは過剰な水と共生していく運命を受け入れざるを得ないと悲観的である。これまで人口の増加、都市の拡大を本来人間が住むべきでない低湿地にまで広げていったことの復讐としてとらえている。

2014年9月に筆者が訪問した時には、フランス時代にあった高床式の住宅が市内各地で復活しつつあった。いまだミシシッピ川下流は人間が住むにはあまりにも過酷な条件である。日本のように高台へ避難あるいは、津波を避けての集団移転のような選択が地形条件からはできない。しかも地球温暖化の影響であろうか、カトリーナ以後、とりわけここ2010年代以降には、異常気象が強大化・常態化して、これまで想定しえないような大規模な水害や高温が世界各地で頻発している。

図14は2000年のセンサス統計区単位でニューオーリンズ生まれの人口比を3段階区分したのち、ハリケーン・カトリーナ襲来の5日後の2005年8月30日現在での浸水範囲を川重ね合わせたものである。①の凡例が統計区の3分の2以上（66%以上）がルイジアナ州生まれの地区である。②が50%～60%、③が50%以下である。興味深いのは、フレンチクォーターやCBD地区などダウンタウンはルイジアナ州以外の居住者が多く、ここが浸水をほぼ免れて、被害も軽微であるのに対して、破堤した工業運河を挟んで東側の東部ニューオーリン

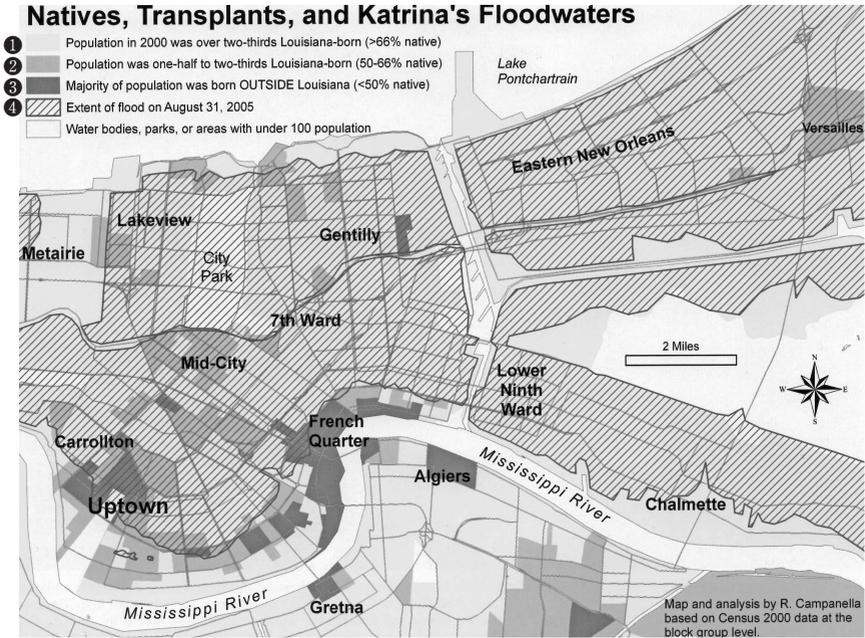


図14 ハリケーン・カトリナによる浸水範囲と住民の居住歴の関係
(Campanella 2006: 403より引用)

ズ、西側のジェンティリイ (Gentilly)、レイクビュー (Lakeview) などの地区は全面水没状態である。この数値はニューオーリンズ生まれの人口比率ではもっと高くなると推定される。ローカル文化を保持する人びとが、より脆弱な自然環境の地に住まざるを得ないパラドックスを暗示している。

2. ヴェルサイユ (Verisailles) —最周縁のベトナム人難民居住区

ニューオーリンズ都市圏の最周縁部にヴェルサイユ地区がある。居住者のほとんどが黒人である東部ニューオーリンズのさらに東約 5 km, 中心市街地からは約 20 km 離れた, St. Bernard 教区に属する。現在, その人口規模は約 1 万人で, 米国最大のベトナム人集住地区となっている。市内からは市バス 60 号

線の終点に位置する。ポンチャートレイ湖の湖岸にも近く、もとは湿地であった。カナダ系フランス人が1805年にこの土地を開発して、新たな町をつくることを夢見て命名したといわれる。その投機的開発が失敗して長らく沼沢地として放置されていたが、NASAの施設ができたことで1970年代に一時期、人口が増えた。その施設が市の西部へ移転したため、ふたたびこの地は放棄地となっていた場所である。

ここは、現在、ほとんどベトナム人難民のみの居住区となっている特異な地区である。その起源は、1975年のベトナム戦争終結のあとにサイゴン（現・ホーチミン市）周辺からの共産主義を忌避した政治難民である。しかし彼らのルーツは、ベトナム北部、紅河デルタの海岸部にある。19世紀にフランスの植民地支配がトンキンといわれる北部に及んだとき、フランス人カトリック宣教師もはいつてきて布教した。そのなかで海岸部には、布教によってカトリックに改宗した村落が生まれた。彼らの多くが弾圧をうけるなかで、南ベトナムへ移住してサイゴンの郊外に集住した。しかし、ベトナム統一によって、南部でも社会主義的政策が浸透するのをきらい、難民申請をしてアメリカ合衆国への再移住を試みたのである。この仲介をしたのが、アメリカのフランス系のカトリック慈善団体である。

ベトナム人難民は最初フロリダにいったん仮定住したが、その後、暮らしがベトナムと気候・風土が似ていて、かつ漁業というすぐにとりかかれる就業機会がある場所として、ニューオーリンズ郊外のこの地が選ばれた。彼らの多くはベトナムの故地では農民で、漁業（内水面・海面）兼業者が多かった。

ここがアメリカでも最大級のベトナム人集住地区（enclave）である。現在の生業は、湖沼でのナマズ、ザリガニなどの漁獲と熱帯性野菜の栽培、小売業などで、それなりの安定した生活スタイルを確立している。図15のショッピングセンターでは、ベトナム人相手の雑貨、食品などを販売している。デイン（廟）も完成し、現在は2世も誕生して活発かつ緊密なコミュニティを形成している。

ニューオーリンズの風景
—コロニアルから現代へ—（野間）



図15 東部のヴェルサイユ（Versailles）地区のベトナム人経営の商店
（2014年8月筆者撮影）

ここにもハリケーン・カトリーナは大きな爪痕を残した。多くの家屋が床下・床上浸水した。最高水位は4.5フィート（1.3m）にも達した。しかし、黒人居住地区に比べて、その復旧は早く、現在は瀟洒な戸建て家屋で暮らしている。二世と一世との考え方、文化の違いかたの葛藤を描いたドキュメンタリー映画「ヴェルサイユとよばれる村」が作られた。そこに隣接して市の産業廃棄物場が建設されることで、彼らが異議申し立てを市当局にした。

ニューオーリンズは、湿地の有り余る水を排水ポンプによってくみ出し、そこを住宅地や工業用地としてきたきわめて人工度の高い海港都市である。近年の地球温暖化による巨大水害の脅威にさらされながら、これまでとは違った応答を求められているといえよう。

[付記]

関西大学東西学術研究所の風景表象研究班の2020年度の共同研究の一環として、2020年12月8日に同研究所で口頭発表した内容を成稿化したものである。

また、在外研究後の研究資金として、日本学術振興会科学研究費「カリブ海域「砂糖植民地」の系譜と産業遺産の比較技術史」(挑戦的萌芽研究) 課題番号: 16K1280, 2016~2019年度, 代表者: 野間晴雄を使用した。

注

- 1) ニューオーリンズ市域とはほぼ同じ面積の日本の都市が広島市(面積906.5 km²)である。広島市の2015年の人口密度は1,317人/km²で、ニューオーリンズは423人/km²と約3分の1にすぎない。アメリカの都市としては市域が広く、なお宅地化していない湿地が多いことに起因している。
- 2) 州都はバトンルージュ(Baton Rouge)で、2020年の市域人口は229,493人、都市圏人口は870,569人である。バトンルージュは、フランス系カナダ人のイヴァヴィルによって1699年に植民が行われた。1719年にミシシッピ川の戦略拠点となった。河川水上交通の中心で、石油・天然ガスの流通中心で、石油化学工業が盛んである(中川正 2013:1148)。
- 3) ノヴァスコシアはカナダの沿海諸州のひとつ、ラテン語で新しいスコットランドの意味である。ヨーロッパ人がカナダでは最も早く入植したところである。ファンディ湾沿岸に入植したフランス系のアカディアン(Acadians)は、英仏植民地抗争(フレンチ・インディアン戦争)末期の1755年、イギリスへの忠誠を疑われて入植地を追放された(大石太郎 2011:78-82)。多くのフランス人は北のニューブランズウィック州に居住している。その一部がルイジアナ州に移住し、ケイジャン(Cajun)と呼ばれて、独自の文化を保持してきた。当該集団と土地との結びつきを重視するエスニックホームランド(homeland)の好例とされる(Jordan 1989)。
- 4) ジャンバラヤ(jambalaya)は肉(豚やうさぎ)・エビなどと野菜をいれた炊き込み御飯で、ルイジアナがスペイン領であったことからバエリアに起源をもつ。ガンボ(gumbo)はケイジャン文化に起源をもつ魚介類や鶏のシチューである。フランス料理のブイヤベースがその基礎にあり、アフリカ起源のオクラ(ガンボ)やスペインが持ち込んだピーマン、トマト、タマネギ、インディアンが用いていたフィレ・パウダー(ササfrasの葉の乾燥した粉末)などが使用され、クレオール文化の代表である。海岸平野のエブリー島にはそこで産出される岩塩とトウガラシ、ビネガーからチリペッパーソースを製造し、世界にタバスコの商標で輸出している。現地では、このほかにも、じつに多く類似の調味料が販売されている。
- 5) カンパネーラは、2000年の職業別電子電話帳を用いて、大都市統計区域(MSA)の人口上位35都市(この人口ではニューオーリンズは31位)を対象に、人口10万人あたりのさまざまな指標を地図化している。そのなかでニューオーリンズが突出しているのは、バーの数(55.3)、ジャズ関連会社の数(3.0)、海事弁護士事務所数(5.3)、家屋の支保

ニューオーリンズの風景
—コロニアルから現代へ— (野間)

- 工会社数 (1.4), サブマリンサンド (Po-Boy) レストラン, ケイジャン・クレオール (Cajun-Creole) レストラン, フレンチレストランの数である。低湿地ゆえに, 木造家屋の傾きを直す会社の数が突出しているのはとりわけ興味深い。ニューオーリンズに現存する最古の会社の1つが1840年代創業の Abry Brothers である (Campanella 2006: 169-185)。
- 6) 多くの白人が州都バトンルージュなどに避難したが, その後の人口回復も芳しくない。私が訪れた2014年でも, まだ市街地のあちこちに復旧されずに放置された場所が点在していた。
 - 7) 南部のニューオーリンズとチャールストンは, リッチモンドなどともに, 南北戦争で黒人奴隷が解放されても, 白人優越体制を維持するため人種隔離が厳然と存在したことで共通する。ニューオーリンズ名物のストリートカー (路面電車) や公立学校通学でも, 黒人は隔離されていた。
 - 8) 野間晴雄「アメリカ南部における「ブラックライス」と「ホワイトライス」—海岸平野の大規模米栽培技術体系の形成と産地移動の含意—」人文地理学会 2020年大会, 2020年11月15日 (オンライン) で発表した (発表要旨は J-Stage に搭載)。
 - 9) 東南アジアのメコン, チャオプラヤ, イラワジデルタでの労働節約的, 土地使用的な米作が成立し, 安価な米の世界市場が形成されると, 高コストで労働集約的な大西洋海岸平野の湿地稲作は衰退する。このことについては, 野間 (2020) を参照のこと。
 - 10) 三角州の平面形は, 鈴木 (1998: 340) によると, それが形成された地形場 (とくに広域的な山麓線と海底勾配) と, 静水の波や流れによる海底の変形様式・程度の両者に規定されるという。
 - 11) ミシシッピ川の右岸にあり, Freeport Sulphur Company の企業城下町となっている。沖合に世界最大級の硫黄鉱床があり, その精製, 輸送を担っていたが, 現在はそれらの施設が移転して人口は減少している。
 - 12) マサチューセッツ州ボストンから大西洋岸に沿って南下, フロリダの南端を回りメキシコ湾岸に沿ってテキサス州にまで断続的に連絡する総延長4,800 km の内陸水路である。小型船舶や商船が風波を避けて安全に航行するために, 1919年に連邦議会の承認をえて建設, 米陸軍工兵隊が維持管理している。連邦法では最小でも12フィート (4 m) の水深を保持する旨を規定しているが, それ以下の7フィート (2.1 m) 程度の水深しか維持できず, 通行の支障となる箇所もある。プレジャーボートの通路ともなっている。
 - 13) インディアン移住法 (Indian Removal Act) は, 1930年にジャクソン大統領によって調印されたアメリカ合衆国政府の政策である。南東部のインディアンを西部に移住させ (多くはインディアン準州, のちのオクラホマ州), その跡地を白人が開拓, 綿作地帯としていった。この過程で一部のインディアンはアカディアに逃れていった。
 - 14) 当時 (18世紀末) のサン・ドマング (ハイチ) は世界で最大の砂糖産地であり, 黒人奴

隸を使用したさとうきびプランテーションが行なわれていた。イギリスがバルバドス（1640～1690）、ジャマイカ（1690～1720）で砂糖産地を確立したのを見て、フランスは、サン・ドマングのほか、フランス領のマルティニーク、グアダループ、ギアナで一気に生産を拡大した。なおハイチの歴史地理的背景については、野間（2021b：14）参照。

- 15) 『オックスフォード米語辞典』では“a town or city with a harbor for seagoing ships”と記載されており、交通地理学的な概念である。一方、harborは自然の地形を利用して、船舶の安全な停泊ができるための自然地理学的な海岸の港の概念で、人工の防波堤、ひょうはくち 錨泊地、ひしけだまり 舥溜などを含むことが一般的である。これが内陸水路（河川・運河・湖）にも転化して用いられた。その意味では、ニューオーリンズはひじょうに広大な後背地をもった海港である。このような大河川の海港としては、セントルイス、マナウス（ブラジルのアマゾン）、武漢（中国湖北省）などがある。
- 16) ニューオーリンズの8月の平均最高気温は32.9℃、湿度は79.4%で、不快指数87.5で、暑くてたまらない最高レベルである。周辺は広大な湿地がひろがり、市の水面の面積比率は48%におよぶ。
- 17) 歴史地理学者の藤岡謙二郎が頻繁に用いた用語（藤岡 1977）で、英語の historical core が訳語として充てられる。『地理学用語事典』では「都市の発展において中心となった歴史的な市街地部分で、景観的・社会的に特徴的なことが多い。都市発展初期などの歴史的建造物も見られ都市の個性を形づくるシンボリックな空間となっている」と定義している（浮田典良編 2003：283）。藤岡ひろ子は、この概念を神戸や横浜・上海の旧居留地に用いて、それをニューオーリンズにまで援用しているのは卓見である。ただし、上のような都市が既存の市街地に隣接して特別な区画として設定されたのに対して、ニューオーリンズの場合は、未開のデルタのなかに「原核」として建設されたことが異なる。
- 18) John Law de Lauriston（1671-1729）はスコットランド出身の経済思想家、実業家、政治家である。真手形主義や稀少価値論を提唱し、後年にはコルベールやテュルゴー、ローが、フランス領ルイジアナのミシシッピ開発の成功を担保とした不換紙幣の発行によって開発しようとした（ミシシッピ計画）。しかし1717年には「西方会社」（West Company）を設立、東インド会社や中国会社など諸会社を統合継承して、フランスの海外貿易特権を一手に握る「インド会社」を設立した。その後「ミシシッピ会社」に改組されて、ローは総裁に就任する。しかし宣伝とは裏腹に、開発は遅々として進まず、人々は争って政府に償還義務のある国債を、償還義務の無い株式に交換して大量の紙幣を印刷して株式配当の支払いに充てた。このミシシッピ計画はフランス王室を巨額の債務から解放したが、1720年5月に取り付け騒ぎが発生し、ミシシッピ会社株は暴落して、ローのミシシッピ計画は破綻した。
- 19) 現在でもフレンチクォーターをフランス語で“古い方形”を意味するヴィユ・カレが用

ニューオーリンズの風景
—コロニアルから現代へ— (野間)

いられている。また単にクォーターとも呼称される。

- 20) この運行は当初水面幅183 m で建設されたが、侵食作用で過去40年間で一部区間では幅610 m まで拡大した。沿岸湿地の喪失のピークが1956~78年であり、MRGO 建設時期と重なっている (大楽ほか 2006 : 28)。湿地が高潮の緩衝帯としての役割を果たしていたことが、この災害であらためて見直された。

文 献

- 浮田典良編 2003. 『最新地理学用語辞典 改訂版』大明堂.
- 大石太郎 2011. 「多民族社会の形成と課題」, 矢ヶ崎隆典編『アメリカ (世界地誌シリーズ 4)』朝倉書店, 74-86頁.
- 貝塚爽平ほか編 1985. 『写真と図でみる地形学』東京大学出版会.
- 鈴木隆介 1998. 『建設技術者のための地形図読図入門 第2巻 低地』古今書院.
- 大楽浩司・水谷武司・佐藤照子 2006. 「ニューオーリンズ周辺の気候・水文・土地環境と水災害に対する脆弱性の増大」, 防災科学技術研究所主要災害調査, 第41号, 23-31頁.
- 中川正 2013. 「バトンルージュ」, 竹内啓一総編集『世界地名大辞典 8, 北アメリカ II』朝倉書店.
- 野間晴雄 1990. 「英領期ベンガル低地の開発と農業—史料による歴史地理的素描—」, 東南アジア研究 28(3), 59-91頁.
- 野間晴雄 1994. 「エコ・ヒストリーとしてのベンガルデルタ—開発・農民・村落—」, 『熱帯環境—その保全と持続的利用— (総合地誌研究叢書23)』, 広島大学総合地誌研究資料センター, 23-57頁, 所収.
- 野間晴雄 2020. 「アメリカ南部における「ブラックライス」と「ホワイトライス」—海岸平野の大規模米栽培技術体系の形成と産地移動の含意—」, 人文地理学会2020年大会, 2020年11月15日 (遠隔), J-Stage に要旨あり.
- 野間晴雄 2021a. 「アメリカ南部のコロニアルな風景素描—サウスカロライナ州チャールストンとその背域—」 関西大学文学論集, 第71巻第1・2合併号, 65-99頁.
- 野間晴雄 2021b. 「イスパニョーラ島二つの国の径路—ドミニカ共和国とハイチ周回覚え書—」, 史泉, 第135号, 2021, 1-23頁.
- 久田由佳子 2014. 「新共和国の建設」, 和田光弘編『大学で学ぶアメリカ史』ミネルヴァ書房, 67-85頁.
- 藤岡謙二郎 1977. 『現代都市の歴史地理学的分析』古今書院.
- 藤岡ひろ子 1987. 「ニューオーリンズの都市構造と核心地区」, 兵庫地理, 第32号, 30-39頁. *地名表記は原著のまま
- 藤岡ひろ子 1991. 「ニューオーリンズの歴史的核心地—ヴューカレ (Vieux Carre)—」, 歴史地理, 第155号, 22-42頁. *地名表記は原著のまま

- ラッシュ, エリザベス. 佐々木夏子訳 2021. 『海がやってくる—気候変動によってアメリカ沿岸部では何が起きているのか—』河出書房新社 (原著は Elizabeth Rush. *Rising: Dispatches from the New American Shore*, 2018, Milkweed).
- 矢ヶ崎典隆編 2011. 『アメリカ (世界地誌シリーズ4)』朝倉書店.
- 山口平四郎 1980. 『港湾の地理』古今書院.
- Bernard, H. A. and Leblanc, R. J. 1965. Résumé of the Quaternary geology of the north western Gulf of Mexico Province, in Wright, H. E. and Frey, D. G. ed. *The Quaternary of the United States*, Princeton Univ. Press, 137-185.
- Campanella, Richard. 2006. *Geographies of New Orleans: Urban Fabrics Before the Storm*, Center for Louisiana Studies, Univ. of Louisiana at Lafayette, Louisiana.
- Campbell, Anne. 2008. *Louisiana: The History of American State*, Clairmont Press, Atlanta.
- Frazier, D. E. 1967. Recent Deltaic Deposits of the Mississippi River: Their Development and Chronology, *Transactions of the Gulf Coast Association of Geological Societies*, 17, 287-315.
- Garvey, Joan B. and Widmer, Mary Lou. 2001. *Louisiana: The First 300 Years*, Garmer Press, New Orleans.
- Garvey, Joan B. and Widmer, Mary Lou. 2014. *Beautiful Crescent: A History of the New Orleans Louisiana*, (Edited and updated by Kathy Chappetta Spiess and Karen Chappetta), Pelican Publishing Company, Gretna.
- Johnson, Walter. 1999. *Soul by Soul: Life inside the Antebellum Slave Market*, Harvard University Press, Massachusetts.
- Jordan, T. G. 1989. Preadaptation and the European colonization in rural North America, *Annales of the Association of American Geographers*, 79, 489-500.
- Morris, Christopher. 2012. *The Big Muddy: An Environmental History of the Mississippi and its Peoples from Hernando de Soto to Hurricane Katrina*, Oxford Univ. Press.
- Samuel, Ray Huber, Leonard, V. and Ogden, Warren C. 1955. *Tales of Mississippi*, Reprinted 2000.

主要参照英文 Web サイト

- ・ <https://www.vianolavie.org/2017/11/26/versailles/>
(ヴェルサイユ地区の概観)
- ・ <https://www.pbs.org/independentlens/documentaries/village-called-versailles/>
(「ヴェルサイユという村」ドキュメンタリーの解説)
- ・ https://en.wikipedia.org/wiki/Versailles,_Louisiana
(ヴェルサイユの歴史)

ニューオーリンズの風景
—コロニアルから現代へ— (野間)

- ・ [https://en.wikipedia.org/wiki/New_Orleans_\(steamboat\)](https://en.wikipedia.org/wiki/New_Orleans_(steamboat))
(蒸気船 New Orleans 号の解説)